

## 審 査 結 果 の 要 旨

報告番号	乙 第 3014 号	氏名	堤 (松尾) 優
審 査 担 当 者	主 査	古賀浩徳	(印)
	副主査	石訂達也	(印)
	副主査	真鍋英昭	(印)
主論文題目： Visual Outcomes and Prognostic Factors of Large Submacular Hemorrhages Secondary to Polypoidal Choroidal Vasculopathy (ポリープ状脈絡膜血管症で多量の黄斑下出血を来した症例の視力予後因子の検討)			

### 審査結果の要旨 (意見)

本研究は、ポリープ状脈絡膜血管症(PCV)の患者 29 例 (30 眼) において、黄斑下出血治療後の視力の長期予後に関わる因子を、後方視的に詳細に検討した研究である。PCV 症例の画像表現も適切であった。単・多変量解析においては、一般的な患者背景因子に加え、黄斑下出血の面積、ガス注入、抗血管内皮増殖因子薬の硝子体注射などの治療因子を加えた多面的な解析がおこなわれた。その結果、発症時の黄斑下出血が広範囲なものは視力不良で、黄斑下出血 1 か月後の視力は 1 年後の視力と相関することが示された。これらの結果は、日常診療における PCV 患者の治療後の管理において有用な情報を与え得る。その点で学位に値する非常に優れた研究であると考え、今後、症例を積み重ねることによって、さらに統計学的にも安定した有用な情報が得られる可能性を秘めた研究である。

### 論文要旨

ポリープ状脈絡膜血管症(PCV)は、加齢黄斑変性の特殊型の1つで、しばしば多量の黄斑下出血をきたし、重篤な視力障害を引き起こす。今回、多量の黄斑下出血をきたした PCV の視力予後と、その予後因子を調査した。対象は久留米大学病院眼科において、PCV に伴う多量の黄斑下出血をきたし、出血後 1 年以上経過観察することができた 29 例 30 眼。黄斑下出血発症時、1 か月後、1 年後、最終受診時の視力を調査した。また、黄斑下出血 1 年後の視力に関わると予想される因子について、単変量および多変量解析を施行した。発症時の平均年齢は 70.8 歳で、黄斑下出血の平均面積は 17.0 乳頭面積、出血後の平均観察期間は 53.5 か月であった。黄斑下出血発症時、1 か月後、1 年後、最終受診時の平均視力は、それぞれ 0.13、0.08、0.14、0.13 であった。黄斑下出血発症 1 年後の視力に影響する予後因子は、単変量解析で高血圧症、黄斑下出血の面積、硝子体出血、ガス注入、抗血管内皮増殖因子薬の硝子体注射、出血後 1 か月の視力であった。これらの因子のうち、多変量解析では発症時の黄斑下出血が広範囲なものは視力不良で、黄斑下出血 1 か月後の視力は 1 年後の視力と相関することが示された。